# 新書太閤記 (二)

# 吉川英治全集

## 第23巻

編纂委員

川口松太郎
川端　康成
小泉　信三
小林　秀雄
佐佐木茂索
獅子　文六

講談社版

吉川英治全集・23　新書太閤記(二)

著　者　吉川英治
装幀者　杉本健吉
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一　電話東京九四二局二一一一(大代表)　振替東京三九三〇
印刷所　凸版印刷株式会社　製本所　大製株式会社
本文用紙　日本パルプ工業株式会社特漉
第一刷発行　昭和四十二年二月二十日
定価　六百八十円
© 一九六七年　吉川英治

# 新書太閤記

（二）

さしえ

中尾　進

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 於市・於虎

きょうは良人の姿にも、閑日の寛ぎが見える。久しぶり暢々とした家庭の主人らしく、妻の眼にもながめられた。

伊勢陣から凱旋して、洲股の居城へ着いたのは、十日も前であったが、帰城早々、将士の賞罰とか、藩務を聴くとか、藤吉郎は間断なく公務に取りまかれていて、彼のからだは、妻のものでもなく、老母のものでもなかった。

『もうよい程にしておこう。余り細かしい事までわしに訊きにくるな。表の用務は彦右衛門に、軍事は竹中半兵衛に、家事は舎弟の小十郎に問え』

藤吉郎も、聴けば限りない用務に飽いたらしい。きょうは家臣達へそう云って一切を抛やった姿である。

独り自分の居間にいた。

行儀のよい城主ではない。家臣からは『殿』と呼ばれているが、彼自身はいわゆる殿様になり澄ましていなかった。時々褥の外へ二本の脚を長々と伸ばして、ごろりと横になる。手枕のまま、何事か按じているらしく、眼をつぶる。寝るまでもない。

と又、腹這いになって、ぼかんと、庭面を見たりしていた。

そして、この小閑に、体を遊ばせてみると、すぐ体をもてあます自身に気づいて、

『おれは、何という、無芸無趣味な人間だろう』

と、自分で感心したりした。

『身に較べるのも勿体ないが、信長様は、総じて多趣味、また御器用でいらっしゃる。小舞や鼓は上手、連歌もなさる、茶事もお好き。そういうこととなると、おれには、はて、何の能があるかしらて？』

考えてみると、彼は、凡そ何も持たなかった。

『ぜひない事だ。信長様の育ちと、おれの生い立ちと、きょうまで通って来た日月がちがっている。いかに茨の中の御苦難はこえて来ても、おれほどな道ではなかった』

彼は又、ぼんやりと、過去の艱難を思い出していた。中村の田にある百姓たちの顔が一つ一つ頭に泛かんでくる。松下嘉兵衛はどうしたろうなどとその後を思う。又、垢じみた白木綿の旅衣一枚で歩いていた頃の自分が眼に見えてくる。

『勿体ない』

急に、彼は坐り直して、今日の恩を、改めて考えた。

君恩に報おうと思う。

天地の恩に酬えねばならぬと知る。

――が、なお黙然と、廂ごしに空を見ていた。するとふと、彼の頭のうちにも、一片の雲みたいな想念が泛かんだ。先頃伊勢陣でつぶさにその働きを見た明智光秀という人物への聯想である。

その人間の事は、時々、思い出すのである。深く感心しているからであった。

『たしかに傑出している。織田家の中では、あの新しい知識はわけても光っている』

今もそう思う事に変りはなかった。けれど、光秀の頭脳には感服しても、その人間まで好きにはなれなかった。主君の信長と光秀とは、性格的にも、近いものがあるやに思われるが、自分と彼とは、いつ迄も、親しくなれない人間のような気がした。

『オ……。お独りで』

そこへ妻の寧子が見えた。

寧子は黙想に耽っている良人の側へ、畏る畏る坐って、そっとたずねた。

『なんぞ、御思案でもしていらっしゃいましたか』

藤吉郎は、顔を解いて、

『いや、ぼんやりしていたまでの事よ。時々ぼんやりするも、薬かと思うてな』

と、笑った。

『余りにお忙しいので、傍目にも、お体が案じられまする』

『いや、忙しいから、健康なのだ。病気する暇もない』

『わたくしよりは御老母様が、稀れには、奥へ渡らせて、表の御用から離れるがよいと、お喞ち遊ばしていらっしゃいます』

『そうそう。母上にも、凱旋の日、お顔を拝したのみで、不沙汰申しあげていたの』

『侍の家庭とは、淋しいものよ。母と子でさえ、一年のうち、幾日朝夕を共にする事があろうぞ、などと御留守中も、時折、仰っしゃっていらっしゃいました』

『……そうか』

と、藤吉郎もやや淋しげに、

『孝行はむずかしいのう。……そのうちに又すぐ、岐阜のお召が参ろう。こうしているのも束の間、どれ、きょうは一日、母上の側で遊ぼうか』

『わたくしからもお願いいたしまする』

と、寧子は、良人の気を迎えて、にこやかに誘いながら、

『それと、先頃、御郷里の中村から、御親類のおえつさまというお方が、幼い者をつれて、御老母様を頼ってお越しなされておりまする』

『中村のおえつと？』

『はい。殿さまのお暇ができたら、お眼にかかって、親しくお願いの事があるとか申されて、もう四、五日ほど前から、御老母様の許に逗留して、お待ちになっておられます』

『はて。おえつ？　……。誰であろうか』

藤吉郎は、しきりと、小首をかしげていたが、

『ま。参ろう』

と、妻と共に、母の住む奥の丸へと足を運んで行った。

寧子は、局へはいると、老母に向って、

『お連れ申し上げました』

と、答えた。

老母は、この数日、藤吉郎の顔を見なかったので、寧子を使いにやって、誘わせたのであった。

『おう、見えましたか』

自分の側に、褥も設けて、待ちわびている風だった。

藤吉郎は、母と並ぶと、

『おゆるし下さい。具足を解いてから、まだ風呂にも、一度か二度しかはいらぬ始末です。――が、もう万端、用事はいいつけました。きょうは一日、寧子や女どもを交え、母上のお側で

遊び暮しましょう』
『一日だけかの』
老母も、浮いて、戯れ顔に、
『寧子よ。こよいは藤吉郎を、奥の丸に泊めて、帰さぬがよいぞ』
と、云った。
顔を紅らめながら、
『畏まりました。母上様のおゆるしがないうちは、御表へお帰し申すことはございませぬ』
と、寧子も云う。
藤吉郎は、わざと丁寧に、
『何と云われても、伺候を怠った罪は、親には不孝、女房には無情、申しわけもなし。斯くの如く、謝り入り奉る』
と、頓首した。
『ホホホホ』
『ははは』
老母も、妻も侍女も、居合わした舎弟の小十郎も、笑いくずれた。
藤吉郎は、それからも、軽口や冗戯ばかり云って、しまいには老母が、
『もう止めてたも。おかしゅうて、おかしゅうて、お腹の皮がいとうなるがの』
と、涙をこぼすほど、皆を笑わせていた。
そのうちに、藤吉郎はふと、片隅の方に、ちょこなんと坐っている七歳ばかりの男の児と、その側にある貧しげな後家風の女に気がついて、
『おや？』
と、眼をとめた。

藤吉郎が、オヤと、眼を注ぐと、子を連れた後家は顔を紅らめて、俯向いた。
彼は、大きな声で、
『それに居るのは、藪山の叔母御ではないかな――母上、あれなる後家どのは、中村の光明寺の山にいた叔母御でしょう』
と、側の老母へ向ってたずねた。
老母は、うなずいて、
『よう覚えておいでたの。いかにも、藪山の加藤弾正どのへ嫁いた、おえつじゃがな』
と、云った。
『おう、やはり藪山の叔母御でしたか。――何でそんな所に、小さくなって、おざるのか。はて、遠慮ぶかい』
手をあげて招きながら、
『こちらへ、こちらへ』
さも懐しげに、彼は呼ぶ。
おえつは、いよいよ身を小さくして、俯向いているばかりだった。
鄙びた後家姿を、凝と疎めて、
年も、四十をこえた頃。
もう二十年も見なかった人なのである。藤吉郎にとっては、母の妹にあたる『おえつ』さんであった。
そのむかし、藤吉郎も日吉とよばれていた頃は、若い叔母のおえつさんは、美人であった。――その美しさは、窶れた中にも、どこかまだ仄かに残っている。
日吉が、光明寺の小僧にやられた時、この叔母は、すぐ下の藪山の加藤弾正と恋仲で、やがて、夫婦になったが、間もなく、その良人の弾正は、戦場で大怪我して、不具になってしまった。

日吉の父、弥右衛門と、ちょうど同じような運命だった。
おえつさんは、貞節だった。日吉は、貞節な叔母の美しい姿を、今でも覚えている。
――けれどあの頃は、日吉にとっては、決して温かい叔母さんではなかった。
村中で鼻つまみの腕白者が、寺小僧から追ん出されたり、茶わん屋から放逐されたり、評判のわるいこと甚だしかったので、若い叔母さんは、そんな腕白が、身内にいるという事を、良人の弾正へ、ひどく肩身せまく思って、日吉が家へ顔を出すと、
『叱。お帰り』
と、犬か猫でも追うように、良人にかくして、帰れという事ばかり責めていたものである。
猫といえば――
日吉が、茶わん屋を出されて、藪山のやしきへ、叔母を頼って行った日、猫が飯をたべているのを眺めて、沁々、羨ましく眺めながら、自分の空腹には、一椀の冷飯も与えられないのを、天地に唧ったこともある。
考えれば、それから二十年。――渺茫と長かった気もするし、わずか二十年――という気もする。
いずれにせよ、なつかしい人ではあった。猫の飯の事など、すぐ思い出されはしても、何らの怨恨などではない。むしろ、恩を謝したい。
『……』
藤吉郎は、凝と、その人を見ているうち、眼に熱いものがあふれて来た。――母とは最も近い肉親である。妹である。母はひそかに、不遇なこの妹の身をも、常々案じていたろうに、まだ曾つて、自分に何も云ったことがない。自分に対して、気がねをしておいでになったものとみえる。
『寧子』
『はい』
『わしが幼い時、たくさん可愛がっていただいた叔母御だ。なぜ、あんな片隅に、おかまいせずにおくか。お褥を、こちらへ移せ』
『幾たびも、おすすめ申しあげましたが、固く御遠慮遊ばしていらっしゃいます。あなた様からも、どうぞ、おすすめを』
『叔母さま。こちらへおいでなさい。……そこでは、御挨拶がなりかねる。年月は変ろうとも、縁に変りはない。御窮屈な辞儀は無用。さあ、さあこれへ』
おえつは漸く、少しばかり膝をすませて、
『お久しゅうございます』
と、両手をつかえ、そして初めて、藤吉郎の面を、しげしげと見上げた。
藤吉郎も、つくづく見て、
『もう四、五日ほど前から御逗留じゃとな』
『はい。……』
『早くお眼にかかればよかった。忙しさに、知らなんだ』
『こんな、お恥ずかしい身なりで、お訊ねして参るのも、気が怯えましたなれど』
『何の、何の。よう来て下された。変られたのう、さすがに』
『あなた様こそ、夢のようなお変りよう、お慶び申しあげます る』
『叔母御には、お幾歳になられたかな』
『もう四十を三つほどこえました』
『それや若い。これからじゃ。……おつれあいの加藤弾正どのには、わしが幼少の時すでに、戦傷をうけて日常寝ておざった

が、その後、御本復になったかな』
『一時は癒えて、起居もできる迄になりましたが、つい四、五年前、この子が生れてから程なく、余病のために亡くなりました』
『そうそう。そのような噂を耳にしたこともあったが、郷里の皆の衆にも疎遠にすぎて申しわけない。――では、それなる童は、弾正どのの遺子か』
『はい。この子が、遺物となりました』
『よい子ではないか』
『腕白者でございます』
『いや、面目ないぞ。わしの昔を云われるようだ。――幾歳になるか』
問われると、おえつは、側にぽかんとしているわが子の膝をついて、
『殿さまのお訊ねじゃ。お答えしやれ』
と、教えた。
『え。なに』
雷の申し子みたいに、赤っ毛で色の黒い男の子は、欄間の金碧だの、侍女たちの衣裳だの、畳の縁だの、きょときょとしていたが、母に膝をつかれて、甘えるように、母の肩へ顔をすり寄せた。
『不作法な』
と、おえつは、睨めるまねして、
『殿さまへ、両手をつかえて、お答え申しあげるのじゃ。そなたの年は幾歳と、お訊ね遊ばしていらっしゃる』
云うと、藤吉郎の方を見て、にやにや笑いながら、
『七歳だい』
と、云った。
『七歳か』
と、藤吉郎は、笑ってしまった。自分の腕白時代を見るような気がしたのである。
『名は何という』
『虎之助』
『ふム。強そうな名だの』
『……』
虎之助は、ふいに、ぴょいと起ちかけた。庭の方に、何か見て、すぐ飛び出そうとしたのである。
『これ』
おえつは、抑えて、
『実は、この子をお手許の小者になと、召し使っていただきたいと思いまして、遙々、中村から伴れて参りました。――父の弾正は、侍でしたから、どうかこの子も、行末は侍の端になとしてやりたいと思いまする。それが、亡き良人には、せめてもの手向けにもなろうかと……』
おえつは、片手に、腕白を抱きながら、畳へ涙をこぼして云った。
藤吉郎は、頷き頷き聞いていたが、彼女の言葉が切れると、
『よいとも。わしの手許にまかせておけ。当人の器量にあるが、何か一人前には仕立ててくれる。――虎之助、これへ来い』と、さし招いた。
『はいッ』
待っていたように虎之助は前へ出て、藤吉郎へお辞儀をした。そして、後の母親を振り向いてから又、手をつかえ直した。
殿さまの前へ呼ばれたらこうするのですよ、と予め教えられていたものだろう。――それを見ているおえつの眼は、いか

にも愛しそうである。又、心配そうである。

『なかなかきかん坊らしいの』

藤吉郎はつぶやいて、側にいる寧子や老母と共に、微笑んだ。

『虎之助』

『はいッ』

『もそっと、前へ来い』

『はい』

『侍になりたいか』

『ええ』

『侍の御奉公は、朝に死に、夕べに死に、始終命がけの御奉公だぞ。出来るか』

『できます』

『そなたの父、加藤弾正どのも侍だった。立派な侍になって、母御を安心させてやれよ』

『……』

虎之助は、黙って頷いたが、座中の人々の眼がみな自分に注がれているのを気づくと、急に、羞恥んで、もじもじした。

おえつは、泣いていた。欣しさが余って涙がとまらなかった。――藤吉郎は、左右を見まわして、

『誰か。小姓組の堀尾茂助に、市松を連れて来いと申せ』

と、いいつけた。

その間に、

『虎之助へ、菓子をやれ』

と、云った。

寧子が、菓子を与えると、虎之助は、それを見まもっていたが、我慢できなくなったとみえて、手を出してボリボリ喰べ始めた。

母親のおえつは、

『これ、虎之助』

顔を紅らめながら、うしろで不作法を叱りかけたが、寧子や老母が、

『気遣うには及ばぬ。そっとしておいたがよい』

と、云ってくれたので、遠くから唯、はらはらと眺めていた。

そこへ堀尾茂助が、自分のうしろに十三、四歳の小姓を伴って、東の縁から座敷へはいり、遙か下に畏まった。

『お召しでございましたか』

茂助が手をつくと、うしろの小姓も、それを倣って、不器用に手をつかえた。

虎之助より年もずっと上だし、身なりも大きいが、その少年も見るからに、まだ土臭い田舎出の芋の子みたいな顔していた。色の黒いところに疱瘡の痕があって、かなつぼ眼の鼻大という不標緻者であった。

『市松に、よい友達が来た。ひきあわせて遣わすから、これへ出て、虎之助と並ぶがよい』

藤吉郎がいうと、市松は羞恥んで、眼ばかりぎょろぎょろさせていた。小姓組の腕白を十人ばかり預かって、兄分格となっている堀尾茂助が、小声で、

『殿さまの前へ進んで、彼の子のわきに坐ればよいのだ……』

と、市松に教える。

市松は、虎之助のわきへ来て坐ったが、横目で、芋の子が芋の子をじろじろ見ていた。

『叔母御。――この腕白を御存じじゃろが。これは、二寺の宿で、桶屋などしていた遠縁の新左衛門が小伜で、市松という童



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だが』

『まあ――』

おえつは、遠くから見まもって、さも驚いたように、

『ではそのお子が、新左衛門様のお伜でございましたか。良人が亡くなった時、手をひいておくやみに来られましたが……。彼の子がまあ、いつの間に』

『去年から仔細あって、わしの手に引き取っておるが、これが又、一通りな童ではない。……ここでは、きつう羞恥んで、神妙に畏まっておるが』

藤吉郎が笑うと、寧子も老母もみな笑いだした。二人の芋の子同志は、いっこう面白くもない顔つきして、横目と横目で、お互いの鼻の恰好などを見合っていた。

市松の親も、以前は侍で、信濃福島の出であった。

親の新左衛門は、尾州二寺へ移住して、桶大工を業とし、

――結句、町人が気らく。

と、何の野望も抱かず、桶のそこを叩いていたが、子の市松は、幼少から烈しい気性だったので、

『どこか、良い縁故はないものか。厩者でも、台所働きでも、武家奉公でさえあれば、どこへでもやるが』

と、その腕白をもてあまして、日頃から心がけていた。

すると、市松が、ことし十四になったばかりの正月、蟹江川の支流で、他家の中間を斬った。

正月の酒にたべ酔って、橋のたもとに寝ていた足軽の足を、遊びに熱していた市松が過まって踏みつけたのである。

足軽は怒って、

『この小僧め』

と、市松をつかまえてひどく蹴とばした。

市松は、頭をかかえて、散々に弄ばれていたが、やがて、切れた凧のように、わが家へ素ッ飛んで来ると、父親が細工場で使っている刀の折を鉈にしたのを持って、又出て行った。

正月なので、仕事場には誰もいなかったし、近所の者も気づかなかった。市松は、顔いろを変えて橋の袂へもどって来た。

足軽はもういなかった。

方々、探し歩いていると、村の居酒屋からひょっこり出て来た。市松は、後から駈けて行って、

『この足めッ』

と、足軽の脛を、鉈で撲りつけた。

足軽は、わッと、ちんばをひいて、蹌けて行った。

『ざまア見ろ』

市松は逃げ出しながら、

『ばかッ。ひょッとこ。意気地なし、冷飯くい』

出放題に罵った。

足軽は、火の如く怒って、この餓鬼めがと、追いかけたが、脛の痛みに、脆くも躓いて又倒れた。

市松は、戻って来て、

『覚えたか。思い知ったか』

と、足軽の頭へ、幾つも鉈をふり下ろして、塩辛のようにしてしまった。

当然、事件になった。

足軽の主人という武士が、桶大工の新左衛門の家へ、何度となく強談に来て、

『小伜を渡せ』と、いう。

渡したら子は殺されるかもしれないと思うので、新左衛門夫婦は、百方、人を頼んで、漸く、

『出家させる』と、いう条件で、生命だけは、事なきを得た。

けれど市松は、
『坊さんになるくらいなら死んじまう』と、わいわい泣く。
いかに脅しても賺しても肯かないのである。――すると身寄のうちで、いっそ峰須賀村の彦右衛門様にお願いしてはとすすめる者があった。
この頃はとんと依頼も来ないが、以前は峰須賀家へはよく仕事にも行った事がある。新左衛門は、市松をつれて、訪ねて行った。ところが主の彦右衛門も、一族の多くも、あらかた洲股の方へ移っているというので、思いきって、洲股城まで頼って行った。
藤吉郎の実父弥右衛門と彼とは、親戚の縁故もあったからである。彦右衛門は又、主君に告げて、この父子をひきあわせた。
藤吉郎は、ひきうけて、
『台所へおいて、飯喰わせておけ。走り使いなどさせて見て、心利いたる見所があれば、茂助の手にかけ、小姓役を見習わすがよい』
と、親を帰した。
やがて、桶屋の子は、先祖の旧姓を名乗って、福島市松とよばれていた。
市松と虎之助を並べておいて、藤吉郎はふたりへ云った。
『仲よくいたせよ』
『はい』
『於市は、年上であるぞ』
『はい』
『新参の於虎を、よく面倒をみてやらねばいかぬ』
『はい』
『では、退れ――』
と、云って又、堀尾茂助へ、
『何分まだ稚ないが、そちの組へ預けておく。よく仕込んで与えよ』
と、いいつけた。
元服前の小童は、それを呼ぶのに、女子のように、名の頭字に『お』をつけて、市松を於市とか、虎之助を略して於虎という風によぶのは、その頃の慣わしだった。
於市と於虎は、主君へお辞儀をすますと、茂助の後に従いて退って行った。
虎之助の母は、うしろ姿を見送って、又、涙をたたえていた。
『親の案じるようなものではおざらぬ。すぐ城内の者にも馴れよう。叔母御、安心するがよい』
藤吉郎は猶、寧子に向って、於虎の母へ、城内の住居を与え、何かと平常も談し相手になってやるがよいと云い足した。
於虎の母は、
『御恩は忘れませぬ』
と、彼の温情をふし拝んだ。
こういう例は、彼女の場合のみではなかった。縁故をたどって、彼を頼って来る者に、彼は一視同仁だった。百川を容れる大海のように、芥も容れ清流も容れた。
ひと月も経つと、於虎は、馴れるどころか、生来の面目をあらわして、城内第一の腕白者と名を取ってしまった。木登り屋根登りはする、小姓組の小さい仲間を泣かす、悪戯はする、逃げることは又おそろしく素迅ッこい。
於虎が現われてから、於市は、自分の名声を奪われたように、忽ち彼を敵視した。

『やい。於虎』
『なんだい』
『ちょっと来い』
『どこへさ』
『どこへでもいいからちょっと来い。ちびのくせにお前は生意気だぞ』
人のいない奥庭へ、於市は於虎を引ッ張って行った。そして、拳をかためて、於虎の頭の上にそっと乗せた。
『於虎。やい』
『……』
『この拳をみろ』
『……』
於虎は、頭のうえの於市の拳を、額ごしに見あげながら、
『見えない』
と、云った。
『――見えないと』
於市は、拳の尖った所で、於虎の頭をぐりぐり押した。於虎は、顔を顰めた。
『どうだ。……見えなければ、これで味が分ったろう。おれの拳はそっとやっても、こんなもんだ。ちびの新参のくせに、あまりのさばると、このお拳に風をくれて、ぐわんと、くらわすぞ』
『……』
『欲しいか』
於虎は又、顔を顰めながら、その顔を横に振った。
『これから、わしの云うことをきくか』
『きく』
『わしに反かないか』
『うん』
『じゃあ、きょうだけは、堪忍してやる。こんど生意気なまねしたら、石垣の下へ投げ飛ばすぞ』
於市は、威張って先に歩いた。於虎は、彼の威嚇にすこし恐れをなしたらしく、悄れ返って従いて行ったが、指の先にまろめていた鼻くそを、於市の襟元へポンと弾いて、くすりと口を抑えて笑っていた。

# 大　義

信長に身を寄せた漂泊の将軍家義昭は、その後、岐阜の城下西ノ店の立正寺を宿所と定められて、一行はそこに起臥していた。
見得坊で、小心で、権式ばかり高く持ちたがりながら、庶民の中に生々と動きかけている時流にはまだ醒めない足利家の君臣は、すこし境遇が落着くと、すぐ貴族臭をあらわして、
『喰物が不味い』とか、
『夜の具がお粗末すぎる』とか、
『かような狭き寺門の内では、仮の御宿所とはいえ、公方様の御威厳にもかかわる』
などと、いろいろな不自由や不足をならべ出して、信長の側衆へ、
『もっと、御待遇を改めていただきたい。さし当って、新将軍のお館なども、どこか景勝の地を選んで御造営にかかってもら

いたいが』
と、申し入れた。
信長は、その要求を聞くと、彼等の根性を憐れんだ。早速、義昭の家臣らを招いて告げた。
『将軍家のお住居が手狭であるから、新館造営にかかって欲しいとのお望みだそうであるが……』
『されば、唯今の宿所では、御不自由も多く、将軍家のお住居としても、あまりに外見が貧しゅうござれば』
『はて、さて』
信長は蔑むように、それに答えた。
『――卿等は、何と悠長なお考えで居られるのか。将軍家がこの信長に頼られたのは、信長に拠って、京師の奸党三好松永の徒を一掃し、失地を奪回し、室町幕府の御家統を正さんとするにあったのではおざらぬか』
『はッ』
『不肖ながら、その大任を一諾いたした以上は、信長は、疾く近日にも、その実現を考えておる。――なんで将軍家のお館など建てておる暇を待とうや。――それとも卿等は、ふたたび都へ帰って天下に立つお望みもすてて、この岐阜の景勝の地に、悠々、巨館を造営して、生涯を信長の食客となって若隠居でもしたいというお心か』
義昭の側臣等は、一言もなく、引き退った。
それからは、余り不平がましい要求もしなかった。
信長の大言は、決して偽ではないことが、間もなく証明された。
秋、八月に入ると、尾濃二ヵ国の各将へ、出兵の令が下った。
九月五日まで、約三万の軍旅は整え終った。そして七日にはもう岐阜から続々と、出発していた。
京都へ、京都へと。
――出発の前夜、城内の大宴の席で、信長は将士を激励して云った。
『果てしない国内の騒乱と、群雄の割拠は、果てしない民衆の塗炭である。万民の苦しみは、一天の大君の御悩みであることは又云うまでもない。先つ年、万里小路惟房卿をお使いとして、微臣信長に、密勅を賜わったが、今又、信長上洛の催しを叡聞あらせられて、ひそかに、優渥な御綸旨と、金襴の戦袍とを賜わった。――わが織田家は、父信秀の代より今日まで、武門の奉公は一に禁門の御守護にありと、その精神を鉄則としておる。故に、このたびの上洛も、大義の軍であって、私の行動ではない。一日もはやく叡慮を安んじ奉らねばならぬ。――時は秋、汝等の飼馬も肥えておろう。各々、信長が旨を旨として、おくるるな、違うな、あだに死ぬな。粉骨砕身、大君のいます都まで押し進めよ』
出陣の宣言に、将士はみな勇躍した。中には、信長の声も終らぬうちに、感極まって、泣いている将もあった。
この壮図には、かねて信長と攻守同盟を結んでいる三河の徳川家康（前・松平元康）も、手勢一千人を派して参加した。
『三河殿のよこした兵数は余り少ない。うわさに違わず、三河殿は狡い』
と、全軍の門出で、多少、非難の声があった。
信長は笑って、
『三河は今、内治と経済を調整えるに、他意のない折である。兵を多くよこせば、失費も多い。そこで非難は浴びても、費用を惜しまれたものだろうが、さりとて彼も尋常な武将ではない。さだめし、よこした将士は粒よりの精兵だろう』

と、敢えて咎めなかった。

果たして、一千の三河兵と、その部将松平勘四郎は、尾濃三万の中に伍して、どこの戦いに会しても、負れはとらなかった。いつも先鋒に立って、味方の道をひらき、その潔さは、家康の名を一層重からしめた。

天気は毎日、好晴だった。

三万の兵馬は、秋ばれの下に黒々とつづいた。先陣が江州の柏原に着いても、後陣はまだ垂井や赤坂を通っているほどその列は長かった。

旌旗天を覆う。

文字どおりな大行軍である。

平尾の宿をすぎ、高宮にかかった頃、前方から、

『使者でござるッ。京師の使者でござる』

と、叫びながら、馬をとばして来た三名の武将があった。

急使は、

『織田どのに拝謁したい』

と、乞い、三好長継と松永久秀の書面を携えていた。

本陣へ伝えると、信長は、

『引いて来い』

と、そのまま使者に会ったが、書面のうちにある和睦を乞うという主旨は、敵の奸計とにらんで、

『いずれ、返辞は、信長が京都へ上った節にいたす。書中にては、三好松永の両所のお心も明らかにお酌みできぬ故、信長が京都の陣門へお訪ねあらば、いつにても会おうと伝えおかれよ』

と、使者に云って、追い返した。

翌暁の十一日。

日の出を合図に、先鋒は愛知川を押し渉っていた。そして翌朝はもう観音寺の城と、箕作城の二つへ攻めかけていた。

観音寺には、江南の豪族、佐々木承禎がいたし、箕作城には、その子の佐々木六角が立て籠っていたからである。

佐々木一族は、三好や松永党と通じていて、前に、新将軍義昭が、そこへ身を寄せた時、義昭を計って殺そうとした事さえある。

当然、ここ琵琶湖を一方に、江州の連山を南に扼した街道の要地で、彼等は、曾つて永禄の四年、織田信長が今川義元の上洛の途上をついて、一挙に粉砕した時のように――こんどは信長をここに撃滅してみせると豪語して待っていた。

で、佐々木六角は、自分の箕作城の守備を、吉田出雲守にあずけ、自分は父のいる観音寺に合体して、そこを本営として、和田、日野その他、領土の塁濠十八ヵ所に、防禦の陣を遺憾なく布いていた。

高地から小手をかざしながら信長は、

『見事な敵の布陣かな。兵書に著してある通りだ』

と、笑った。

そして、佐久間信盛、丹羽長秀の二将に、

『箕作に向え』

と、令を下し、その先鋒には、三河の松平隊をつけて、偖、その際にも亦、

『このたびの上洛は、私の戦いとは異なる旨、発向の前夜、篤と申し聞けたとおりである。大義の弓矢たることを全軍心にとめて、逃ぐる者は殺すな。益なき民家は焼くな。能う限りに、刈入れまえの田はふみ荒すな』

と云い渡した。

# 二十一日記

まだ琵琶湖の水も見えない朝霧のうちからであった。
霧を衝いて、黒々と、三万の兵馬はうごき出していた。
丹羽、佐久間などの隊が、箕作城へ攻めかかった合図を、信長は狼火で知ると、
『本陣を和田山へ移せ』
と、四辺へ下知した。
和田山も敵の要害である。もちろん敵軍が充満している。そこへ我が本陣を移せと云う。――信長の命令は、戦えとか、攻めろとか、奪れとかいう言葉も略して、無人の地を行く気概でいるのであった。
『なに、信長が自身で襲せたと』
和田山の守将山中山城守は望楼から呼ばわる物見に大声で答えるなり、砦にひそむ味方の全体へ、
『これぞ天の与えというもの。――観音寺、箕作の両城は、尠なくも、一ヵ月はきっと支え得る。そのまに松永三好の軍勢やら、湖北の味方が、信長の退路を断つ。――だが、信長が死を急いで、自身わが砦へかかって来たのは、正に、絶好の機。武門の運をとり逃がすな。信長の首を打って取れや』
と、剣をたたいて演舌した。
『うわあッ』
全軍は、それに応えた。

信長にどれほど智謀の士が多くとも、三万の兵が捨身で来ようと、佐々木一族の鉄壁は、必らず一ヵ月以上はそこで喰い止めるだろうと――それは彼等の信念でもあったし、又、四隣の強国の一致した観察であったのだ。
――が、和田山一帯の丘陵は、それから半日の間に、銃煙と土けむりと雄たけびの中に、陥落してしまった。
唯見るいちめんの戦塵の中に、
『この一期』
と、ばかり和田山を中心に馳駆しているのは、殆んど、信長の兵のみだった。二刻余りも戦うと、脆くも、山中山城守の部下は、先を争って、附近の耕地や、山や、湖畔や、八方へ敗走してしまった。
『追うなッ、追うな』
信長の声は、もう和田山の上に在った。逸はやく立てた旌旗が午近い太陽の下に鮮やかに見える。血と泥にまみれた将士は、追々に麾下へ集まった。そして、勝鬨をあげて、午の兵糧を喰った。
箕作方面から何度となく伝令が来た。丹羽、佐久間の先手となってかかった三河の松平勢は、血を浴びて勇戦しているところとある。
刻々、味方に有利な報が信長の手に集まった。
まだ陽も落ちぬまに、箕作落城の報がはいった。
黄昏に近づくと、観音寺の城の方面に、黒煙があがった。木下藤吉郎、その他の手勢が、もう城に迫ったとみえる。
『いざ行け』
総攻撃の令が下る。信長も陣をうつし、箕作その他の全軍も、一せいに観音寺へ押しつめた。
宵闇の迫る頃には、もう一番乗り二番乗りの名のりが敵の城



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com